

途別小学校の研究

I. 研究主題

「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」
～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～

II. 研究主題設定の理由

1 今日的な教育を取り巻く情勢

(1) アクティブ・ラーニングの必要性について

平成20年の学習指導要領改訂では、学校教育法第30条第2項に示された「基礎的・基本的な知識及び技能」「それらを活用するための思考力・判断力・表現力、その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」の、いわゆる学力の三要素から構成される「確かな学力」の育成を目指す教育課程の編成が全国的に進められてきた。その中で全国学力・学習状況調査の結果等から、北海道の児童生徒の学力が課題となり、各校における様々な学力向上の取組が行われた結果、習得にかかわる問題については改善傾向が見られるようになった。その一方で、習得した知識・技能を活用して問題を解く力の定着については、喫緊の課題となっている。

今の子どもたちが将来成人して活躍する頃の社会は、少子高齢化による生産年齢人口の減少や、価値観の違いから様々な課題が生じるグローバル化の進展等により、構造的にも環境的にも大きく様変わりすることが予想される。このような社会の中で必要とされる資質・能力の育成に関連して、OECDが提唱するキーコンピテンシーの育成や、ユネスコが提唱するESD等が実施されているが、共通点は「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子どもたちが基礎的・基本的な知識・技能を習得するとともに、実社会の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である」という視点である。

新しい時代に必要となる力を子どもたちにはぐくむためには、「何を知っているか」から、「知識を活用しどう解決するか」へ求める資質・能力を転換し、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが重要であり、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」を推進することが必要である。

(2) アクティブ・ラーニングへの入口として・・・授業のユニバーサルデザイン化

文部科学省の調査によると、平成23年5月1日現在、義務教育段階において特別支援学校及び小学校・中学校の特別支援学級の在籍者並びに通級による指導を受けている児童生徒の総数の占める割合は約2.7パーセントとなっている。また、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について、平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果は、約6.5パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性を示している。

「障害者の権利に関する条約」を踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える「共生社会」を目指し、障がいのある者と障がいのない者が共に学ぶ仕組みである「インクルーシブ教育システム」の理念のもと、特別支援教育を推進していく必要がある。

「インクルーシブ教育システム」においては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別

の教育的ニーズのある児童に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に答える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であり、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておく必要があるとのことから、道教委は校内研修プログラムを作成した。

全国的にもこの「インクルーシブ教育」実現に向けた具体的な授業・学習デザインとして「授業と学習のユニバーサルデザイン」の視点が広がってきている。それは、①学級全ての子どもが、②授業・学習に積極的、主体的に関わり、互いを尊重し合う互恵的な学びを目指す授業・学習のことで、子どもたちの能動的な学習を生み出す手立てとなり、アクティブ・ラーニングへの入口となるのではないかと考えた。

2 本校の現状と2年次までの成果・反省から

本校の研修は平成26年度まで、2年計画で「知識を深め、自分の考えを広げようとする子どもを目指して～ICT 機器等の効果的な活用を通して～」の主題のもと、ICT 機器等を効果的に活用し、視覚的に訴える魅力ある教材開発の工夫と、その効果的な指導法の在り方について研修を深めてきた。

ICT 機器等を効果的に活用し、「見通し」や「振り返り」、「確認」、「類型・比較」や「分析・整理」等の学習活動を重視した授業を展開することで、児童の興味・関心の高まりや子どもの理解を深める点において一定の成果が見られた。

①本校の現状

平成27年度、新たに研修をスタートさせるにあたり、本校の現状に関するアンケートを実施した。また、これまでの反省を踏まえ、児童の実態を整理すると、「知識や技能を身に付けるために、真面目に一生懸命に取り組むことができるが、それらを活用したり、発展させたりするのが苦手である」「日常的には伸び伸びと元気に過ごしているが、人前で話す力を高める必要がある」等の課題が見えた。これらの課題を踏まえ、習得した知識や技術を次の新たな学びにつなげ、探求する力を育てること（活用する力）、そして学んだことを適切に「話す」力を育てる授業づくりを目指し、研究主題を「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」と定めた。

以上の2つの力を高める授業づくりを目指すにあたって、副題として「～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～」と定めた。「ユニバーサルデザインの視点」とは、「全ての子どもにとって参加しやすく、わかりやすい授業」のことである。さまざまな子どもがいる中で、どの子どもにとっても「参加でき、わかる」授業となるように、ユニバーサルデザインの視点に沿って①課題や発問を提示し、新たな学びを探究するために焦点化できるようにすること、②ICT等の活用によって教材を視覚化させること、③対話など話す活動を取り入れ、思考が共有化されること等の授業改善を図ることによって、「新たな学び」を探究し、活用力を身に付けることができるのではないかと考えた。

②1年次までの成果と課題を受けて、2年次取り組んだこと

- (1) ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を基本とし、子どもの思考を「焦点化」させられるよう指導内容を精選すること、何を「視覚化するか」厳選すること、子ども同士の考えを、目的をもって「共有化」させることを重視した授業づくりをしていく。
- (2) 子どもが習得した知識や技能を生かしながら「主体的・協働的」な学び【アクティブ・ラーニング】型授業へ発展できるような活動を取り入れること。
→「アクティブ・ラーニング型」授業をつくる第一歩として本校職員で共有した方法は、「話し合うこと（＝共有化）」、子どもが学んだことに対し「振り返りを行うこと」とした。

③2年次までの成果と課題

【成果】

- ・本校の児童は、支援在籍かどうかにかかわらず、気配りや目配りなど多くの配慮をしなければならぬため、全員が参加できること、わかることを目指すためには、学ぶ内容の焦点化、教材や板書の視覚化、子ども同士で相談しながら進める共有化など、ユニバーサルデザインの視点で授業を構成することは大切だとわかった。
- ・単元や1単位時間の授業のゴールを、子ども自身が見通しをもてるように課題提示をすると話し合いの内容が充実することがわかった。特に高学年では、何を解決すれば良いのかを理解し、そのためにどのような活動が必要かを自分たちで考え、学習リーダーが進めるという様子が見られた。
- ・ペア学習や小グループの話し合いによって、始めは理解していなかったことに気付くことができた様子が見られたり、自分の考えが不安な児童が安心感を得られたりすることができ、全体交流に意欲をつなげられたことが良かった。

【課題】

- ・間接指導時に「主体的」な学び、ペア交流などの「対話的」な学びをさせることが多くなるため、どのように授業に取り入れていくのか、間接指導の進め方を指導していくのが課題である。
- ・児童の力に個人差があるので、「協働的」がまだできていない。人の話を聞く力がないのに話し合いは難しい。教師との対話では1対1になってしまうので、子ども同士で対話的に進められるように、どのように授業に取り入れるかを考えるのが課題である。また、子ども同士が「話を聞いてくれる相手だ」とお互いに信頼し合える児童を育てなければならない。
- ・「協働」のイメージがつかみにくいし、そのためにどうするかがわかりにくい。
- ・新学習指導要領の論点整理の中に出てきた言葉だったが、最終的な答申では「主体的・対話的で深い学び」に変わったので、そこを意識しながら研究を進めていくと良い。

④今年度の重点

昨年度の反省と研修計画第3年次を踏まえ、今年度は、以下の2点を重視した授業づくりを目指していく。

1 つ目…ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を基本とし、子どもの思考を「焦点化」させるため、教材研究の際に指導内容を精選すること、何を「視覚化するか」厳選すること、子ども同士の考えを、目的をもって「共有化」させることを重視した授業づくりをしていく。

2 つ目…児童が主体的に学べるよう、課題提示の工夫をすること（間接指導時の作業内容も含む）、対話によって深い学びになるよう、何を話し合わせるかを教材研究時に練ること、学んだ内容を振り返り、次時の学びへの意欲につなげることの3点を重視する。

以上を踏まえ、仮説に沿った授業をすることで、子どもたちが対話的に学ぶ「ひびき合い」と、主体的に学ぶ「新たな学びを探求する子どもの育成」を図ることができるのではないかと考える。しかし、上記の重点を全て盛り込んだ授業を1時間の中で展開するのではなく、その時間に学ばせることを焦点化したうえで、「学ばせ方」のポイントを授業者が絞るよう工夫する。

①導入時に、「考えてみたい」と思わせる課題と出合わせ、見通しをもたせる「課題意識重視」授業

②展開時に話し合い活動を取り入れる「対話重視」授業

③終末時に学習内容や学習過程を振り返らせたり自己評価したりする「振り返り重視」授業

「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れることを目的とするのではなく、単元や本時の目標を達成するために、取り入れた方が効果的に達成できるという時間や場面を見極めて取り入れていく方向で考えていく。

Ⅲ. 研究の仮説

仮説1	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業をすることによって、全ての子にとって参加しやすく、わかりやすい授業となり、習得と活用につながるのではないか。
仮説2	見通しをもって活動に取り組み、その活動を学びに結び付けるための話し合いや振り返りを行うことによって、主体的・対話的で深い学びにつながるのではないか。

Ⅳ. 研究教科

全教科・領域

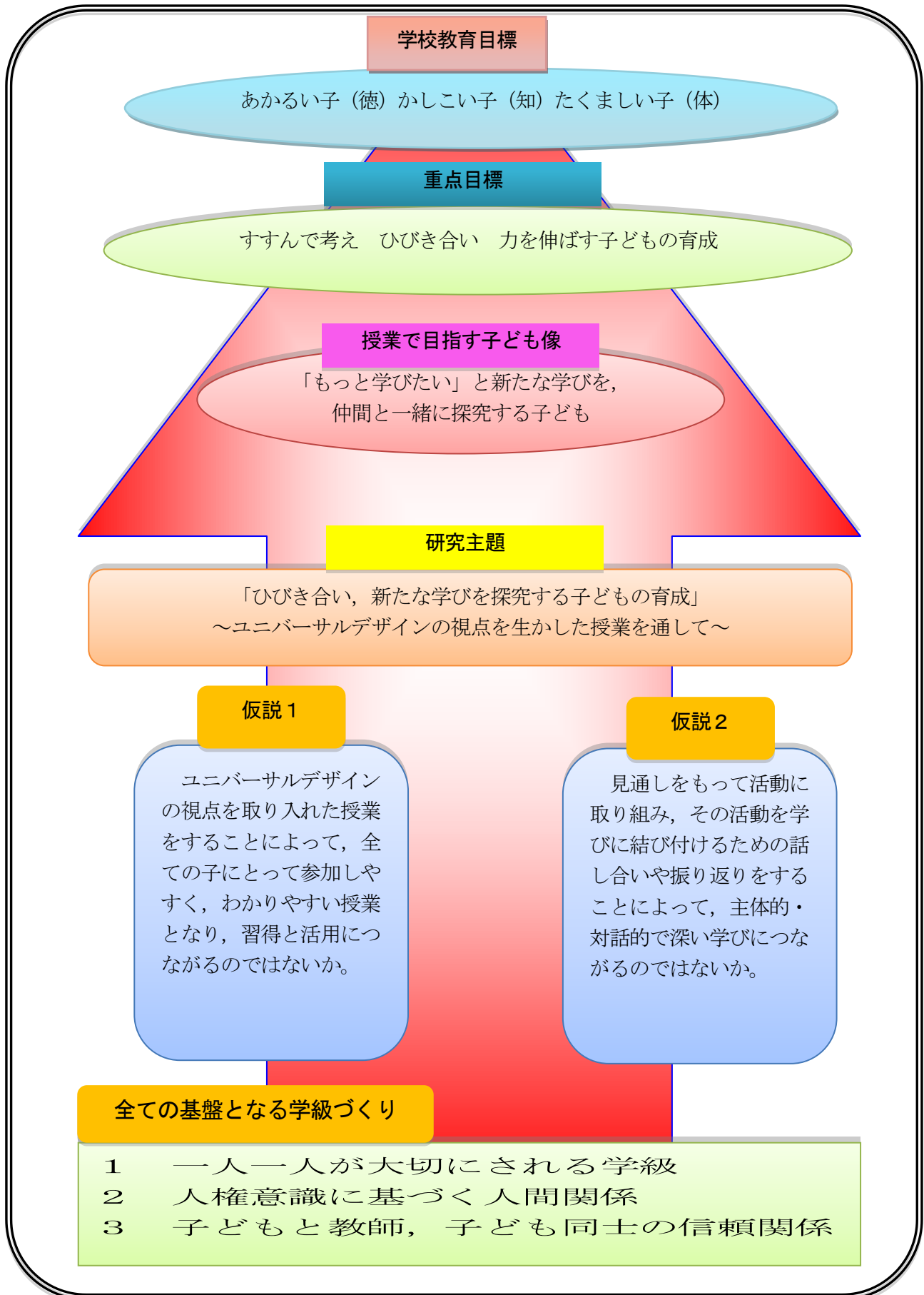
Ⅴ. 研究の内容

- 1 理論研修で、話し方や聞き方に関わる「目指す子ども像」と、それを目指すための「複式の学習スタイル」（単式学級では「課題提示の仕方」）において共通理解を図り、授業実践の中で主体的・対話的で深い学びとのつながりを追究する。
- 2 ユニバーサルデザイン化した授業、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を計画・実施し、教職員で参観・交流する。
- 3 3年次のまとめをする。

Ⅵ. 研究計画・・・3カ年計画

- 1 第1年次
 - (1) 研究主題、仮説、研究内容などの決定
 - (2) 授業のユニバーサルデザインについて…理論研修
 - (3) 授業実践、検証
 - (4) 1年次のまとめ
- 2 第2年次
 - (1) ユニバーサルデザインとアクティブ・ラーニングのつながりについて…理論研修
 - (2) 授業実践・検証
 - (3) 2年次のまとめ
- 3 第3年次（今年度）
 - (1) 指導方法の工夫・改善
 - (2) 授業形態の工夫
 - (3) 幕別町複式教育研究会
 - (4) 3年次のまとめ

VII. 全体構造図



Ⅷ. 話し合いの各学年（低・中・高）の到達目標

○主題

低学年	中学年	高学年
○ことばをつむぎ合う楽しさを味わう	○わかち合う喜びを味わい、話し合うことに対する信頼感を培う。	○話し合うことで認識が深まる面白さを体験し、多様な価値観の存在を知る。

○情意的要素

低学年	中学年	高学年
○対話の楽しさを知り、話し合うことに積極的になる。 ・相手を尊重し、協調して話し合う。 ・素直に自分の思ったことを話す。	○相手を受け入れ、自分を素直に語る。 ・自分と異なる考えや経験の持ち主と交流する大切さと難しさを知る。 ・新しいことを知るために、進んで聞こうとする。	○進んで課題に向き合い、論理的な話し合いをしようとする。 ・感情に流されず、論理的に話し合うことの価値を理解する。 ・当事者意識を持って、粘り強く話し合う。 ・自分の言葉に責任を持つ。 ・相手の意見を尊重する。

○技能的要素

低学年	中学年	高学年
○話題からそれずに対話できるようになる。 (聞く) ・話を最後まで聞き、正しく聞き取る。 ・要点をとらえて聞く。 ・正しい姿勢で聞く。 ・話に反応を示しながら聞く。 (応じる) ・わからないことを訊ねる。 ・詳しく知りたいことを訊ねる。 ・大事だと思った点を確認する。 ・相手や自分が言葉につまってもあわてず待つ。 ・感心したり驚いたりした気持ちは、表情や態度、言葉で表す。 ・話されたことと関連した情報があれば、積極的に提供する。	○聞いて、訊ねながら対話を進めることができる。 (聞く) ・自分の体験に引き寄せ、自分の考えと比べて聞く。 ・話の流れを考えて聞く。 (応じる) ・相手の考えを取り入れつつ、自分の考えを述べる。 (話す) ・場面と相手に応じて声の大きさを調節したり、適切な言葉づかいで話したりする。 (はこぶ) ・話の中心をはっきりさせて話し合う。	○相手の意見と自分の意見を比較しながら、話し合いを進める。 (聞く) ・話の内容を分類して聞く。 ・相手の意図を理解しようとして聞く。 ・事実と意見を区別して聞く。 ・聞きながら自分の意見がまとめられるようにする。 (応じる) ・相手の発言内容を整理する。 ・相手の発言に対する疑問点を明確にする。 ・相手の発言に付け加えたり、視点を変えたりする。 (話す) ・根拠を明らかにして話す。 ・相手の気持ちに配慮した言い方をする。 (はこぶ)

<p>(話す)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訊ねられたことに対応した応答ができる。 ・対話において, 交代して話す。 ・相手に身体を向けて話す。 <p>(はこぶ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題からそれずに話す。 		<ul style="list-style-type: none"> ・計画的に話し合い, 目的から外れたときは途中で軌道修正をする。 ・論点がずれないように話そうとする。 ・話の内容を深めるように話そうとする。 ・途中で, それまでの話をまとめながら話し合いを進める。
---	--	---

○認知的要素

低学年	中学年	高学年
<p>○ことばに対する関心を高める。 (思考力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事柄の時間的・空間的順序をとらえる。 ・対比的表現において違いを見出す。 ・並列, 列挙の表現において, 共通性や類似性を見出す。 ・事象と事由の関係を捉える。 <p>(コミュニケーション能力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いは, 話し手と聞き手の共同作業であることを認識する。 ・様々な場面での挨拶の仕方, 日常生活での基本的応答, 外部の人に対する話し方を身につける。 	<p>○コミュニケーションの仕組みを理解する。 (思考力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事象の推移や変化に発展性や法則性を見出す。 ・類化, 分類によって差異性, 共通性を見出す。 ・個別のそれぞれから共通性を見出す。 ・原因と結果の関係を捉える。 <p>(コミュニケーション能力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対話における「話して」と「聞き手」の役割を知る。 ・聞く, 聴く, 訊くの違いを知る。(受動的・能動的) ・聞き合う対話の進め方を身につける。 ・インタビューの仕方を身につける。 	<p>○多様な考えの存在, 異なる意見との交流の意義を理解する。 (思考力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仮説を立て, それを証明(論証, 実証)する。 ・物事の相関的な関係を捉える。 <p>(コミュニケーション能力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・円滑な話し合いの進め方を知る。